

「生徒国際イノベーションフォーラム 2020 @オンライン」開催

世界中の生徒や教師たちが、「学校のWell-being」を語り合う

「学校のWell-being (よりよいあり方)」とは、どのような状態で、それはいかにして実現されるのか。日本イノベーション教育ネットワーク(協力OECD/*1)が進める「地方創生イノベーションスクール2030 第2期(ISN2.0)」の実践・研究の集大成として、2020年8~9月、「生徒国際イノベーションフォーラム2020 @オンライン」(実行委員長 ISN 共同代表: 福島大学学長 三浦浩喜教授)が開催された。世界9か国(*2)、日本も全国の中学校・高校から生徒や教師、教育関係者らが参加。多様な参加者が、対等な立場で語り合い、未来の学校や教育のあり方を描き出した。

「ライブトーク」プログラム

DAY 1 August 11th

- 15:00 Item 1 Opening Ceremony
- 15:30 Item 2 Learning & Inquiry Fair
- 16:30 Item 3.1 Introduction about Workshop
- 16:50 Item 3.2 Knowledge Building Workshop ①
- 18:20 Item 3.3 Knowledge Sharing & Short Feedback
- 18:30 Item 4 Something Fun! ①

DAY2 August 12th

- 15:00 Item 5 Reflection On DAY 1
- 15:15 Item 6 Knowledge Building Workshop ②
- 16:20 Item 7 Knowledge Building Workshop ③
- 17:10 Item 8 Drawing Future Well-being School
- 18:10 Item 9 Something Fun! ②
- 18:40 Item 10 Closing Ceremony



オンラインイベント「生徒国際イノベーションフォーラム2020 @オンライン」のトップ画面。参加者はこのページから各テーマの掲示板にアクセスし、意見交換を行った。

世界中の生徒と教師が参加し、2日間のライブトークを実施

日本イノベーション教育ネットワーク(協力OECD/以下、ISN)の主要事業である「地方創生イノベーションスクール2030」では、2030年の社会で求められる資質・能力や、それを育成する教育のあり方を、OECD(経済協力開発機構)や文部科学省の協力を得て実践・研究している。18年に開始した第2期の実践・研究の集大成として、20年

8~9月、「学校のWell-being」をテーマに、世界9か国の中高生、大学生、教師、研究者らがオンライン上で語り合う「生徒国際イノベーションフォーラム2020 @オンライン」が開催された。会期中は、インターネット上の掲示板において意見交換が行われ、8月11・12日には、オンライン会議ツールを利用した「ライブトーク」が実施された。本記事では、各国から約300人が参加し、教育の未来を見つめて語り合った「ライブトーク」の様態をレポートする。

*1 国際連携で教育研究を行う産学コンソーシアム。これまで行われたイベントは、本誌2018年6月号P.50-53、2019年10月号P.20-23で紹介。

*2 日本、アメリカ、インドネシア、シンガポール、中国、トルコ、ドイツ、フィリピン、マレーシア

すべての参加者が

未来の教育のエポックメーカーに

「ライブトーク」の目標は、未来の学校の枠組みや指標づくりの第一歩として、世界中の生徒や教師が、30年の「学校のWellbeing」を考え、今ある学校の変化の可能性と課題を明らかにし、そこから、「個人のWellbeing」と「社会のWellbeing」を実現する学校づくりに結びつけることだ。参加者は、事前にSNS上で自己紹介や自身の取り組みの紹介、意見交換を行って当日を迎えた。

開会の挨拶で、ISN共同代表の東京大学公共政策大学院 鈴木寛教授は、「カンファレンスを楽しんで新たな友人をつくるとともに、学びの本質や未来の教育についてじっくりと考えてほしい。すべての参加者が、これからの教育のエポックメーカーとなることを願う」と、参加者に呼びかけた。

続いて、ISNが中高生の探究学習を通じて地方創生モデルの創出を目指していることを受け、参加者はグループに分かれ、中高生は事前に準備した資料を基に、自校の探究学習のプロセスや成果を発表した。

ワークショップ第1部

現在の学校の課題は何か、生徒や教師、研究者らが意見を交わす

「学校のWellbeing」について議論するメインプログラムの「Knowledge Building Workshop」は、3部構成で行われた。参加者は38のグループに分かれ、2日間とも同じメンバーで議論。海外の参加者を含むグループは原則、英語を主言語とした。

第1部のテーマは、学校の現状と課題だ。グループごとに、教育、仕事、環境、ワーク・ライフ・バランス、健康、コミュニティなど、「OECD BLI (Better Life Index / よりよい暮らし指標)」の11カテゴリー（*2）の中から1つが割りあてられ、それをテーマに議論が進められた。ワークショップの開始時には、モデレーターから、「参加者の誰もが『正解』を持っておらず、思ったことや考えたことを遠慮せず、自由に発信しよう」といった声かけがあった。

各カテゴリーには、その内容に応じて3つの質問があらかじめ設定されており、それらに沿って意見交換

が行われた（写真1）。図は、「教育」のカテゴリーの質問と、それが割りあてられたグループで出された意見の例。

2日目の冒頭に、モデレーターが第1部の振り返りを共有した際には、各グループで議論された次のような

図 「教育」のカテゴリーの3つの質問と、意見の一例

- あなたが参加している授業の中で、最も豊かな授業は？
 - コミュニケーションを取る授業
 - グループの中で課題を設定して考える授業
- 大人になった時に必要な力を育むために、学校で中核となる活動、授業は？
 - 各自が考えて問題解決ができる探究活動
 - 自分で問いを考える力を養える授業
- これからの学校で扱う必要のある学習内容、新しい教科は何？
 - （探究学習の前段階として）思考力の基礎を養う授業
 - LGBT、人権などへの理解を促すための授業
 - SDGsに対する危機感を生徒が実感できるほど掘り下げた授業
 - 社会で起きていることを集中的に学ぶ授業

* 取材を基に編集部で作成。

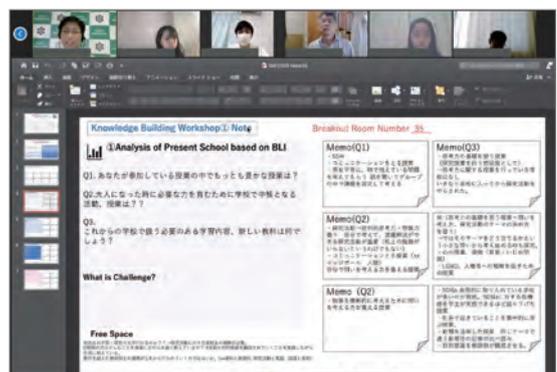


写真1 「教育」のグループの様子。生徒や教師、教育関係者など、異なる立場のメンバーが混在するように、グループが組まれた。

論点が紹介された（行頭のカッコ内は11のカテゴリー）。

- （教育） 私たちの将来のためには、思考力を強化する授業が重要だ。
- （仕事） 探究学習は生徒に自身のキャリアを考える機会をもたらす。
- （ワーク・ライフ・バランス） 生徒自身がアイデアを高められるよう、疑問を持ったリ調査したりする時間を設けることが重要だ。
- （健康） 生徒は、十分な睡眠を取っておらず、ストレスを感じている。ストレスは、教師と生徒に誤解を生じさせる原因にもなる。
- （環境） 学校は、ソーラーパネル設置やエアコンの適切な温度設定、

* 2 11のカテゴリーは、収入、仕事、居住、安全、健康、ワーク・ライフ・バランス、教育、人生の幸福、コミュニティ、市民参加、環境。

リサイクル活動を通じて、環境問題に貢献している。

・(安全) 対人関係に不安を感じている生徒もいる。

第1部では、各グループがテーマ

ワークショップ第2部

未来の学校のデザインを議論。対話を通して考えが変化する生徒も

2日目に実施した第2部では、第1部の議論の内容に基づき、未来の学校のあり方を考えた。

未来の学校での学びのあり方が論点となった「教育」のグループでは、未来の学校に求めるものが明確になっていく生徒の姿が見られた(写真2)。第1部では、「知識を学ぶだけならば、オンラインでも十分かもしれない。対話や探究ができる場であることが、学校の価値だ」といった意見が多数を占めた。だが、ある生徒は、「一晩じっくり考えて思ったのだが、実践するにしても、知識がなければ、何を実践すべきか考えられない。例えば、新型コロナウイルス

に沿って学校や教育の現状を見つめ直し、よい取り組みに目を向ける一方で、次第に議論は今後の課題や目指すべき方向性へと発展していった。

スも、その危険性に関する知識がなければ、人の行動は変わらなかった。やはり知識を軽視してはならない」



写真2 議論が深まるにつれて、参加者は積極的になり、一人ひとりの発言量が増えていった。

ワークショップ第3部

理想の実現に向けた戦略と見通しを立て、参加者全員で共有

第3部では、第2部で議論した学校のあり方をいかにして実現していくか、戦略と見通しを検討した。

「教育」のグループでは、生徒が「未来の学校も、軸は授業であるべきだ」と思う。その上で個人の関心や適性を考慮し、それに応じた学びを選択肢として設けてほしい」と発言。その実現に向けて、別の生徒が「学びを変えるためには、生徒だけでは

と発言した。そして、「未来の学校における知識の習得については、社会に出てからの実践で役立つという観点を重視してほしい」と語った。探究学習のあり方について議論したグループでは、生徒が、「初日のプレゼンテーションを聞いて思ったことだが、探究学習では全国の学校が地方の課題を取り上げており、テーマが似通っている。もっと個人が興味を持った探究学習ができると面白

いと思う」と問題提起した。それを聞いた同グループの教師は、「その通りだ」と思う。地域研究にとらわれず、国政に関心がある生徒は、政治について探究すればよいし、もっと身近なこともテーマになり得る。その点は、学校や教師の課題として考えていきたい」と語った。各グループでは議論の深まりに伴い、未来の学校や教育の方向性が徐々に明らかになっていった。

なく、先生同士の対話も大切だと思う。先生同士がつながり、生徒の様々な個性を理解したり、オンラインや対面の授業をどのような方向性の下でつくっていくかを話し合ったりすることで、実際に学校は変わっていくはず」と、ビジョンを提示した。「健康」のグループでは、生徒の健康増進のために、売店や自動販売機で健康食品を販売することをプラン

